南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

交わり深め 力あわせ
救いのおとずれ広げよう

〒902-0067　那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人　W.F.バーント司教　1部40円
http://www.naha.catholic.jp/

(1) 2022年5月1日（毎月1日発行）　カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ　第762号（5月号）

教皇フランシスコ、2022年復活祭メッセージ
（ローマと全世界へ）2022年4月17日

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、主のご復活おめでとうございます。

十字架につけられたイエスが復活されました。イエスの死を悼み、家に閉じこもり、恐れと苦悩に満ちている人々、そのような人々のただ中にイエスは立っておられます。イエスはその人々のところに来て言います。「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ二十・19）。イエスは両手両足にある傷、脇腹にある傷を見せます。その人は幽霊ではありません。正真正銘のイエスです。十字架で死に、墓に横たえられたその人、イエスです。信じられないといった様子の弟子たちに、イエスは重ねて言われます。「あなたがたに平和があるように」（二十一節）

わたしたちも戦争の中で迎えたこの復活祭を信じられない思いで見ています。わたしたちは、あまりにも多くの流血と暴力を見てきました。わたしたちの心も恐怖と苦悩に満ちています。多くの兄弟姉妹が爆撃から身を守るために閉じこもらなければならないのです。イエスが本当に復活し、死に打ち勝ったということを信じることが難しくおもわれます。これは錯覚なのでしょうか。わたしたちの想像の産物なのでしょうか。

いいえ、錯覚ではありません。東方教会の信徒たちにとって大切な復活祭の宣言が、今日、かつてないほど鳴り響いています。「キリストは復活された。まことによみがえられた」。果てしなく続くように思われた四旬節の終わりに、今日、わたしたちはかつてないほど主を必要としています。二年間のパンデミックを経て、深い痕跡が残っています。それは、手を取り合って、力を合わせて、ともにトンネルから抜け出る時だったのです。しかしながら、わたしたちのうちにはまだイエスの霊ではなく、カインの霊があるのです。アベルを兄弟としてではなく、ライバルとして見て、いかにして彼を排除しようかと考えるカインの霊が、わたしたちのうちに宿っていることを示しています。わたしたちは、愛の勝利を信じ、和解を願うために、十字架につけられ復活した主を必要としています。今日、わたしたちはかつてないほど、主がわたしたちの中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と繰り返し告げてくださることを必要としています。

主イエスにしかできないことです。今日、主だけがわたしたちに平和を告げる権利を持っています。イエスだけが傷を、わたしたちの傷を、負っているからです。主イエスの傷は確かにわたしたちの傷です。二つの理由からそのことが言えます。第一に、わたしたちの罪によって、わたしたちの心の頑なさによって、わたしたちの兄弟殺しの憎しみによって、主に傷を負わせたからです。第二に、主はその傷をわたしたちのために担い、ご自分の栄光のか

らだから取り除くことなく、ご自分の中に永遠に留めておこうとされたからです。それはわたしたちへの愛の消えないしるしであり、永遠の執りなしの行為であり、天の父はそれを見ることによって、わたしたちと全世界をあわれんでくださるのです。復活したイエスのからだにある傷は、わたしたちが平和を得、平和のうちにとどまることができるように、イエスが愛の武器でわたしたちのために戦い、勝ち取られた闘いのしるしなのです。

その栄光に輝く傷を観るとき、わたしたちの疑い深い目は大きく開かれ、固く閉ざされた心は打ち破られ、復活のメッセージを受け入れるのです。「あなたがたに平和があるように」

兄弟姉妹の皆さん、わたしたちの生活に、家庭に、国に、キリストの平和を迎え入れようではありませんか。

残酷で無意味な戦争に引きずり込まれ、暴力と破壊によって傷めつけられたウクライナに、平和が訪れますように。この苦しみと死の恐ろしい夜に、新しい希望の夜明けが早く訪れますように。平和のための決断がなされますように。人々が苦しんでいるときに、力で威嚇するようなことはやめましょう。

どうか、戦争に慣れてしまわないでください。平和を希求することに積極的に関わりましょう。バルコニーから、街角から、平和を叫びましょう。「平和を!」と。各国の指導者たちが、人々の平和への願いに耳を傾けてくれますように。約七十年前に科学者たちは穏やかでない問いかけを投げかけました。「わたしたちは人類に絶滅をもたらすか、それとも人類が戦争を放棄するか」(ラッセル・アインシュタイン宣言、一九五五年七月九日)。この問いかけに指導者たちが耳を傾けてくれますように。

ウクライナの多くの犠牲者、何百万人もの難民や国内避難民、引き裂かれた家族、独り残された高齢者、失われた生活、壊滅した都市、そのすべてをわたしは心に刻んでいます。戦争で孤児になり、逃げてきた子どもたちの姿が目に浮かびます。飢えや十分な医療を受けられずにいのちを落とす子どもたち、虐待や暴力の犠牲となっている子どもたち、生まれる権利を奪われた子どもたちなど、世界中で苦しんでいる多くの子どもたちの叫びが聞こえてきます。

戦争の痛みの中にも、ヨーロッパ各地で多くの家庭や地域社会の扉が開かれ移住者や難民を受け入れているという、勇気づけられる兆しもあります。こうした多くの慈愛に満ちた行いが、時に利己主義や個人主義によって荒廃するわたしたちの社会にとって恵みとなりますように。そしてすべての人が受け入れられる社会となることを祈っています。

ヨーロッパでの紛争を通じて、わたしたちが世界の多くの地域で起こっていることにも関心の目を向けるようになりますように。あまりにも多くの地域で紛争状態があり、苦しみ、悲しみがあります。見過ごすことができず、忘れてはならない状況があります。

長年にわたる紛争と分裂に苦しむ中東に平和が訪れますように。この栄光に輝く日、わたしたちはエルサレムの平和と、エルサレムを愛するすべての人々(詩編一二二参照)、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒の平和を求めます。イスラエル人、パレスチナ人、そして聖都に住むすべての人が、巡礼者たちとともに、平和の美を体験し、兄弟愛のうちに暮らし、それぞれの権利を互いに尊重しながら、聖地に自由にアクセスすることができますように。

レバノン、シリア、イラクの人々、特に中東に住むすべてのキリスト教共同体に、平和と和解がありますように。

また、長年の緊張から安定を取り戻したリビアに平和が訪れますように。そして、誰からも忘れられた紛争に苦しみ、犠牲者が絶えないイエメンにおいて、最近締結された停戦が国民に希望を与えてくれますように。

憎しみと暴力の劇的なシナリオが続くミャンマーと、危険な社会的緊張が続き、悲惨な人道危機が人々に大きな苦しみをもたらしているアフガニスタンに、和解のたまものが与えられますよう、復活した主にお願いいたします。

アフリカ大陸全体に平和が訪れ、その地で人々が苦しんでいる搾取とテロによる流血、特にサヘル地域におけるテロ攻撃が止まり、人々の兄弟愛の中に具体的な支援を見出すことができますように。深刻な人道危機に見舞われているエチオピアで、対話と和解の道が新たに開かれますように。また、コンゴ民主共和国での暴力に終止符が打たれますように。壊滅的な洪水に見舞われた南アフリカ共和国東部の人々のために、祈りと連帯が欠けることがありませんように。

パンデミックの困難さを抱える中で、犯罪、暴力、汚職、麻薬密売によって社会状況が悪化しているラテンアメリカにおいて、復活したキリストが人々に付き添い、支えてくださいますように。

カナダのカトリック教会が歩んでいる先住民族との和解の道に、復活された主が寄り添ってくださるよう祈り求めましょう。復活されたキリストの霊が過去の傷を癒し、真理と兄弟愛を求めるように心を整えてくださいますように。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、すべての戦争は全人類に影響を与え、死別や難民の悲劇、経済危機や食糧危機にいたるまで、さまざまな後遺症をもたらします。その兆候はすでにわたしたちが目にしているところです。絶え間なく続く戦争の兆候、そして人生における多くの痛ましい敗北を前にして、罪、恐れ、死に打ち勝ったイエス・キリストは、悪と暴力に屈しないようにとわたしたちを励ましているのです。兄弟姉妹の皆さん、キリストの平和において勝利をおさめましょう。平和は可能です。平和は義務です。平和はすべての人が責任を持って第一に優先するべきものです。

ニュースファイル

聖霊の働きを体験し、喜び合うお母さんたち

デニス・フェルナンデス神父
真栄原教会　主任司祭

カトリック教会では五月を聖母月と呼んでいます。国や地域によって五月に聖母マリアを称える様々な行事を行います。例えば、ロザリオの祈りや聖母の歌を歌い、マリア像を行列で運んで尊敬をあらわします。五月三一日にマリアがエリザベトを訪問する祝日を祝うことで聖母月を締めくくるのは、とっても意義深いものであります。

マリアがエリザベトを訪問したとき、互いに喜びあった瞬間を一緒に考えてみたいと思います。

お告げを受けたマリアが急いでユダの町に向かい、彼女の親戚のエリザベトを助けようとしている箇所がルカ福音書の第一章にあります。それはすべて大きな喜びから始まります。天使ガブリエルがマリアのところに来て、「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられます」（ルカ一・28）と挨拶します。

救い主の誕生についての預言者たちの言葉は、マリアによって実現しました（ゼカリア九・9、ゼファニヤ三・14～15参照）。マリアはシオンの娘として選ばれたことを喜ぶでしょう。その娘の中に世の罪を取り除くメシア、救い主がおられます。

喜びが二重になるには分かち合う必要があります。マリアは、主が胎内にいるという良いたよりを告げるために急いでいます。彼女は受肉が可能であるというしるしとして「あなたの親類のエリザベトも年をとっているが男の子を身ごもっています。不妊の女と言われていたのにもう六ヵ月になっています。神にできないことは何一つありません」（ルカ一・36～37）と言われたので、急いでいます。マリアは受肉をもたらす神の力を疑っているのではなく、エリザベトが初めて子どもを産むには高齢であることと妊娠中の他の母親と同じように、エリザベトを助ける必要があると気づきます。

ザカリアの家に入ると、マリアはエリザベトに挨拶します。エリザベトが大声で「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んで踊りました」（ルカ一・44）と驚いています。妊娠中の二人の母親と胎内のお子さんたちは喜びを分かち合っています。ダビデが契約の箱をエルサレムに運んだときに踊ったように（サムエル上六・15参照）洗礼者ヨハネも、新しい契約の箱で踊ったのです。

マリアとマリアの胎内にいるイエスの前で喜びをもって踊りました。ヨハネは生まれる前にすぐに預言者になり、母親のエリザベトにキリストを告げます。その結果、エリザベトはマリアが子を身ごもっていることを認識して、母マリアを神の母と褒め称えます。したがって、一連の行動全体がマリアの挨拶によって始まりました。

イエスが聖霊によってマリアの胎内に宿られたように、エリザベトの内にも働いています。天使がザカリアに「子は既に母の胎にいるときから聖霊に満たされています」（ルカ一・15）と告げました。ですから聖霊の力によって、ヨハネはイエスの存在を感じ、踊って母親のエリザベトに受肉の神秘を明らかにしました。エリザベトはマリアに向かって「あなたは女の中で祝福された方、わたしの主のお母さま、胎内のお子さまも祝福されています」と公に宣言しました。マリアの神聖な母性は、単なる肉体的なものではありません。エリザベトはイエス・キリストのお母さんマリアをメシアの母として認めたとき、天使がマリアに「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます」（ルカ一・35）と言った言葉を確立しました。

受肉は聖霊の働きですが、マリアはイエスを胎内に受け入れる前に、従順な信仰によって心の中で受け入れました。このようにエリザベトは信仰においてマリアの偉大さを称え、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方はなんと幸いでしょう」（ルカ一・45）と彼女を褒めています。「神の言葉を聞き、それを守る人は幸いである」（ルカ十一・28）と言われたイエスの言葉をルカはマリアに当てはめます。マリアは神の言葉を忠実に心に留め、忍耐強く実を結ぶ良い土壌でした。

聖アンブロジオはマリアの訪問について「エリザベトはマリアの声を聞きましたが、ヨハネは最初にイエスの恵みの近いことを感じました。エリザベトは自然な順序で聞き、ヨハネは神秘的な恵みで歓喜し、エリザベトはマリアを神の母として認め、ヨハネは喜びでキリストに応えます」と記しています。

マリアがイエスを心と胎内に受け入れて養い育てたように、私たちもマリアのようにイエスのみ言葉を心の中で思い巡らし、その実りを出会う人々と分かち合う喜びを願うばかりです。

Mary, the Mother of God

"And Mary kept all these things, reflecting on them in her heart."
(Luke 2:19)

This month we see a lot of gifts intended for Mothers' Day. As we honor our mothers in such a special way, I also would like to give my reflection honoring the Blessed Mother. Mary, the mother of Jesus, the mother of the Savior of the World, is properly called the "Mother of God." It is worth reflecting upon this powerful title of our Blessed Mother. It's also important to understand that this title says just as much about Jesus as it does about His Blessed Mother.

In calling Mary the "Mother of God," we distinctly acknowledge one fact of human life. A mother is not just the source of flesh, she is not just the mother of the body of her children, she is also the mother of that person. Being a mother is not just something biological, it is something sacred and holy and is part of the divine order of God's creation. Jesus was Mary's Child, and this Child is God. Therefore, it is proper logic to call Mary the "Mother of God."

That is an amazing fact to think about. God has a mother! He has a particular person who carried Him in her womb, nursed Him, raised Him, taught Him, loved Him, was there for Him, and pondered who He was throughout His life. This last fact is especially beautiful to look at.

The Gospel passage above states, "And Mary kept all these things, reflecting on them in her heart." She did this as a caring mother. Her love for the Child Jesus was as unique as the love of any mother. However, while it should be noted that she was a mother in perfection and loved Him with a perfect love, He was not only her Son but was also God and perfect in every way.

What does this reveal? It shows us that the motherly love shared between Mary and Jesus was profound, inspiring, mysterious, glorious, and truly sacred! The mystery of their love is worth reflecting on throughout our lives, keeping it fully alive in our hearts. Mary is an example for every mother and is also an example for all of us who seek to love others with a pure and holy heart.

We should all reflect, today, upon the holy and captivating relationship that Mary shared with her Divine Son. Try to fathom what this love was like. Imagine the deep emotion and passion that filled her heart. Contemplate the level of unwavering commitment she had. Envision the unbreakable bond that was forged as a result of her love.

Dearest Mother Mary, you loved your Divine Son with a perfect love. Your heart burned with an unquenchable fire of motherly charity. Your bond with Jesus was one that was perfect in every way. Help us to open our hearts to that same love you share with us. Come be our mother and care for us as you cared for your Son Jesus. May we also love you with the love Jesus had for you and with the love He now lavishes upon you in Heaven.

Mother Mary, the Mother of God, pray for us!

Fr. Peter Che
Koza Catholic Church

カリタス那覇から

与那原の修道会を通して沢山の支援物資を頂きましたので、カリタス那覇であちらこちらの団体に配布しました。

2022年4月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2022年4月5日（火）、会議前に安里教会聖堂にて聖体賛美式を行う、主式は藤澤神父。

1. 報告及び連絡事項：始めの祈りと司会はクレーバー神父が担当。

・前回（3月会議）の議事録の確認を新田が行い、承認を得た。

・4月2日（土）に行われた、石垣、海星幼稚園の落成式について、津波古さんから報告が行われた。ウェイン司教も参列され、体調不良はその際の疲れもあってのことと推察されるので、無理をさせないよう、皆で気をつけるよう要請があった。落成式は、地元の新聞にも取り上げられ、市内唯一の私立幼稚園ということもあり、卒園生でもある市長からも祝辞が寄せられ、盛大かつ良い式典であったことが報告された。

・フィリピン台風災害支援金のその後についてマーシーさんから報告が行われた。災害支援に携わっている ONDのシスター達と、ネルソン神父宛支援金が届けられ、困窮している方々に支援物資を届けることができ、大変役立っているとのことであった。

・与那原教会で行われている防水工事について、主任のクレーバー神父から報告が行われた。傷んだ窓枠の取替も行われ、綺麗になっている。文化財としても価値のある建物なので、近代建築物としての文化遺産登録の話もあったが、祈りの場としての活用を優先するため、登録は断った旨の報告もあった。

・建物の老朽化が進んでいる「愛楽園」の聖堂について、園から対処を求められている旨、主任のボスコ神父から報告が行われた。園内にある聖公会の聖堂は、建物を園に寄付することで、メンテナンスは園が見てくれるようになっていて、引き続き聖公会が建物を使用できるようになっている。カトリック教会もそのようにしてはどうかとの提案があり、具体的な方法を検討して、前向きに取り組んでいくことが決められた。宮古島南静園についても同じように検討して欲しい旨藤澤神父からも提案があり、今後教区で調査検討していくことが決められた。

2. 審議事項

・コロナウィルスの変異株について、事務局長の津波古さんから報告が行われた。重病化するケースは少ないものの、感染者数は増加傾向にあり、猛威を振るいつつある。以前のように活動を停止する必要はないと思われるが、活動を継続していくために、日頃の注意を徹底するよう要請が行われた。特に司祭たちは、信徒と接触する機会が多いので、自分の健康管理には気をつけて取り組んで欲しい。歌は控える、奏楽で補う等、聖週間も今まで通りの感染対策対応でなされるよう要請があった。

・マーシーさんから4月の司教の予定が報告された。13日の聖香油ミサを安里で午前10時に主式。聖木曜日と聖土曜日は開南で主式。聖金曜日は安里で主式予定であることが報告された。また、23日には安里で、教区女性の会の集いで講話されることも報告された。その他、5月15日に名護教会、29日に宮古島平良教会の訪問が予定されていることが報告された。

・新しい「ミサの式次第」について、典礼担当のブイ神父から報告が行われた。9月の全国典礼担当者会議を経て最終的な決定となるので、その後10月に教区としての方針を示していくことが報告された。

・聖週間の典礼について、4月13日（水）の聖香油ミサは安里において、司祭団、助祭団のみで午前10時から行われること、聖木曜日の洗足式は省略あるいは簡素化すること、聖金曜日の入堂後の祈り、司祭は床に伏さずにひざまずいて行うこと、十字架の表敬は、接吻ではなく頭を下げての一礼による表敬に留めること、聖体安置式は、主任の判断で安置場所を選定できること、聖土曜日の火の儀式やローソクを灯しながらの入堂は通常通り行っても良いが、復活賛歌は歌わないで唱えること等が要請された。

・教区シノドスについて、担当のマイケル神父から状況と要請が行われた。小教区からの意見等の提出をもとに、5月3日の午後2時から安里教会においてシノドス前会議が行われるので、主任司祭と信徒の代表者、司教にも参列が要請された。

・2021年の教勢報告書が事務局より提示され、正確な小教区の人数の把握や、司牧への活用に役立てるよう要請があった。

・予算計画に関連して、特に車の買い替えのための予算の計上が多く見受けられたので、小教区の収支の現状とも照らしながら、車は大きな買い物になるので、大切に扱われるよう要請があった。

・その他

・押川司教から、直接司教が受けたクレームについて、司祭たちに注意喚起が促された。主任司祭たちは、小教区に保育園や幼稚園、学校を有している場合、お誕生日会や様々な行事に招待されることもあると思う。自分では気さくに接したいと思ってのことでも、保護者、父兄から見ると、だらしない格好と受け止められることもある。特に入園式や卒園式といった大きな行事は、日本人にとってはフォーマルな服装が求められるので、司祭として相応しい着衣で参列するようお願いしたいとの申し入れがあった。

・フランシス神父が救急搬送された件に付き、4月22日に、嘉手納消防署から人命救助に対し、適切な対応であったことが評価され、一緒に居た司祭たちに表彰状が贈られることが報告された。

・開南教会の古川神父から、有馬神父様が施設に入られたことの報告と、様々に関わりを繋いでくれたことへの感謝が述べられた。

・次回拡大司祭・助祭会議は2022年5月3日（火）午前10時から12時、安里教区センターで行なわれることが報告された。

2022年4月12日　承認：ウェイン・フランシス・バーント司教　記録：新田　選

たて軸よこ軸

天国のエレミヤ神父さまへ

コザ教会　松堂康子

エレミヤ神父様が帰天なさってからもう二十二年になりますね。自分の身内は皆七十代で亡くなっているから自分も多分そうだろうと冗談交じりにおっしゃっていた神父様。本当にそうなってしまいましたね。私も七十代になった昨今、しきりに神父様のことが思われるのです。

私が小学校の頃、首里教会で催し物があって、ふと見上げると聖堂をバックに白衣を着た三人の神父様がやって来るのが見えました。

三人の神父様は背が高く、色白で朝日を背に神々しく輝いていました。思わず立ち止まって見とれている私に気づいて、にこっと微笑んでくれました。それがエレミア神父様との初めての出会いでした。今思えば、三人の神父様は、沖縄に着任間もないエレミヤ神父様、ルイス神父様とオーバン神父様だったと思います。

それから数年後、エレミヤ神父様は泡瀬教会の主任司祭として来られました。コザ教会がまだできない頃です。ミサが終わると神父様は聖堂の出入り口で信徒が出て来るのを待って一人一人に声をかけます。意外と長い時間です。それでも私は待っています。一段落した頃、私の方を振り返って「ヤスコ　今日は何？」と声をかけてくれます。

「あのさ、理科の先生が言ってたけど、生命の起源はミトコンドリアのような微生物だって。」

もしそうだとしたら聖書の天地創造の話やアダムとイヴなどはどうなるのだろうか。

「微生物はどこから来たの？」

「それは今から分かるかも知れない。」「それが解明できたとしてもその先は？」「・・・・」「先の先・・・・それは鎖のように無限に天に繋がっていて、その先にいるのが神様なんだよ。」

「・・・」

多感で反抗期の中学生の私は学校で仕入れた知識を今日も神父様にふっかけた。半ば納得したものの、何よりも満足したのは忙しい神父様が、中学生の私とも真剣に向き合ってくれたことでした。

三十代の頃、親友が自死したときにやり場のない悲しみを打ち明けに名護の黙想の家に行きました。その日エレミヤ神父様は一人で黙想中だと聞いていたので。神父様は何時間も泣き続ける私を黙って見守ってくれました。泣くだけ泣いた私は少し落ち着いて帰路につきました。

神父様は多くを語ることはしなかったがいつも親身になって私の話を聞いてくれました。「聴く」ことの大切さを実感し、私も神父様に倣いそれを心がけるようにしてきました。また、聖堂で一人祈っていらっしゃる姿も聖職者の尊い姿として大変惹かれるものがありました。

宗教改革の話しをしたときに、「ルターは教会の外に飛び出して改革をしようとしたので、現在のように多くの宗派を派生させることにつながった。同じ頃、聖イグナチオのように教会の中にとどまって教会を改革しようとした人たちもいるんだよ。それが肝心なんだ」とおっしゃっていた神父様。教会に対する不満がある時はいつも神父様のその言葉を思い出し、教会と共に歩んでいこうと肝に銘じている私です。

天国でエレミヤ神父様に会える日を楽しみにしながら。

人命救助への貢献に感謝状贈呈

レクレーションの最中に倒れた同僚神父の救急対応が大変適切であったとして、一緒にレクに参加していた司祭たちが、去る4月24日に、ニライ消防本部から人命救助に対する表彰を受けました。

NPO法人ぶどう園の会
訪問看護ステーション クララ
TEL&FAX：098-937-5001
住所　沖縄市泡瀬2丁目37-15
・基本受付　月曜日～金曜日（申込、相談など）
・営業時間　8:30～17:30
・営 業 日　24時間365日（緊急対応含む）

『声』角笛

ひとり黙想会

コザ教会　稲福捷夫

御多分に漏れず、コロナ禍で「やーぐまい」を余儀なくされている。しかし「なんくるないさ」というテーゲー主義でここまで誤魔化してきた。三月末まで、娘と孫二人と同居していて、強い味方になってくれていた。新学期から彼女らは父親のいる名古屋に戻ったのだ。だが私には強い味方がまだ残されている。それは私が密かに「俺の書斎」と豪語（？）している市の図書館が我が家から二、三分程度のところにあることだ。書籍、CDなどは借り放題である。

聖週間も近いので、「ひとり黙想会」と洒落込むことにした。静かに、ひたすらバッハの「マタイ受難曲」のDVDを三時間余もかけて鑑賞しようという目論見である。

かねがね聖金曜日の福音書の朗読には、バッハの受難曲を想起させられていた。マタイ受難曲はマタイ福音書二十六章一節から二十七章六十六節がベースになっていて、その聖書の個所を福音史家（エヴァンゲリスト）がレチタテーヴォの唱法で歌い、それにコラールとアリアが加わる構造になっている。私が今回、鑑賞するのは、カール・リヒターが指揮し、ペーター・シュライアーが福音史家を歌う、一九七一年にミュンヘンで録画されたものである。カール・リヒターはバッハのスペシャリストとしてつとに有名で、ペーター・シュライアーは昔から私が好きな歌い手である。かれの福音史家は秀逸である。

当然この受難劇の主人公はイエス・キリストだ。それにペテロ、ユダ、ピラトと「イスラエルの民衆」が登場する。今日は彼らを中心に黙想したい。

まず、イエス・キリストだが、人間的な側面が強調されているように思った。イエスは、死の直前に「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と絶叫する。福音史家がこれは「わが神、わが神、なんぞわれを捨てたまいし？」という意味だと教えてくれる。これには布石があった。ゲッセマネの森での祈りがそれである。そこでイエスは「父よ、もしできることならば、この苦き杯がわたしの前を通り過ぎるようにしてください」と必死に祈っていたのである。その間、一番弟子たちは惰眠を貪っていた。そこにはイエスの苦しみに対する共感はない。これほどの温度差。何たる孤独。

さて、ペテロに関しては、彼が保身からイエスを三度否認するシーンが感動的である。福音史家が「『鶏のなく前に、汝三度われを否まん』と告げたまいしイエスの御ことばを思い出し、外に出て痛く泣けり」と歌い終わる。自己嫌悪、慙愧に打ちひしがれるペテロが泣き崩れる。そこにヴァイオリン・ソロそしてメゾソプラノのアリア「あわれみたまえ。わが神よ…」が続く。

ピッチカートに慟哭を聴くのはわたしだけだろうか？　これほど悲しく美しい調べは耳にしたことはない。

イスカリオテのユダは嫌われ者である。私も好きではない。しかし受難曲でイエスが「汝らのなかのひとり、われを売らん」と言ったとき、弟子たちは「われなるか？」と口々に言う。その時コラールが、「われなり・・・」と歌う。そのとき「ほっとした」自分がいた。思えば「キリストの受難・死・復活」の壮大な救済ドラマを俯瞰してみると、ドラマを動かす狂言回しが必要だった。それがたまたまユダだったと考えると、彼は被害者かもしれない。

私のカトリックの友人はピラトが可哀そうだという。イエスの裁判は彼なりに誠意を尽くしたこと。しかるに二千年後の今日でも悪い裁判官のままでいるというのだ。彼の言い分には納得する部分がある。しかし自分への戒めとしては別の考えもある。ローマ人ピラトにとってイスラエルはあくまで外国だったのだ。彼にとってイスラエルの問題は対岸の火事だったのである。類焼を免れればよかったのだ。彼は「自分は関係ない」と手を洗った。今現在起こっているウクライナでの戦争。私たちは関係ないと手を洗っていいのだろうか？

最後に「イスラエルの民衆」である。すなわちユダヤ人である。私たちは聖金曜日のミサで「十字架につくべし」と絶叫する。この言葉でユダヤ人がこの二千年、どれほど苦しんできたかは想像するに余りあるものがある。中世にはディアスポラとして流れ着いた土地でゲットー（ユダヤ人居住地）に閉じ込められてきた。また一一四四年と一一八九年の十字軍ではフランスとイギリスのユダヤ人がそれぞれ大きな被害を受けている。

一四七八年には「かくれユダヤ人」を摘発するための異端審問所がスペインで設けられ、その刑罰は罪状に応じて鞭打ち、財産没収、投獄そして死刑であった。帝政ロシア後期一八八一年以降にはポグロムが繰り返し起こっている。ポグロムとはユダヤ人とその財産に対する集団的な襲撃・破壊・虐殺などのことである。そしてユダヤ人迫害の極めつけは、ドイツのナチスのホロコストである。

因みにミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」はウクライナの寒村に住むユダヤ人の物語であるが、その背景にはロシアのポグロムがある。現在のウクライナの大統領ゼレンスキー氏はユダヤ系だという。彼の曾祖父母はポグロムの犠牲者だった可能性だってある。

これで一人黙想会は終わりとする。

カトリック文化センターからお知らせ

いつも当センターをご利用頂きありがとうございます。
5月より営業時間、定休日が変更になりますので、お知らせいたします。

営業日：火曜日～土曜日 10:00AM～6:00PM
日曜日 10:30AM～5:30PM
定休日：月曜日・祝日

問合せ：電話098-868-4649（﨑山）

女性の会

新年の集い

四月二十三日、土曜日、安里教会において「那覇教区女性の会新年の集い」が開催されました。

例年は一月に各教会一品料理持ち寄りで、余興も楽しみながら賑やかに行われる新年会ですが、本年度はコロナ感染防止のために会食無しで、ウェイン司教様の講話を中心に行われました。コロナ禍の中でも女性の会の新年の集いが持てたのは幸いでした。

「ウクライナの平和を求める祈り」を全員で唱えた後、講話に入りました。病院入院中に食事や運動療法を受けたというウェイン司教様は大分スマートになって、血色もよく若返って見えました。入院中に他の患者や職員との接触の中で自然に教会の話が出て福音宣教に繋がったという体験から、宣教とは決しておおげさにやるものではなくて、生活の場から滲み出るものだと語られました。

シノドスのことが中心で、重要な項目を拾い上げての講話でした。その中で他者である兄弟の話をよく聞いたのであれば私たちの役割を果たした、ということになる。

特に自分と合わない人との関係において、神様の声を聞く、聖霊の声を聞く、そして兄弟姉妹の声を聞く。これが一番大事だということ。他者の話をよく聞き、自分の意見も勇気をもって出して分かち合うこと、そして個々人に与えられたタレントを皆のために使うことであり、それは教区目標である「交わりを深め、力をあわせ、救いのおとずれを広げよう」ということに通ずるということでした。

私にはどのようなタレントがあるのか、そして那覇教区の同じ信者としてキリストのために同じ旅をする者として何ができるのか考え、行動する必要があると思われました。今回のウェイン司教様の講話はそれを考える契機になったと思います。

講話の後、ウェイン司教様司式のもとでミサが行われ、キリストの復活を賛美しつつ散会となりました。

（コザ教会　松堂康子）

訃報

◆小禄教会
赤嶺　キク　様
二〇二二年四月十四日帰天
享年九十歳

洗礼おめでとうございます

開南教会	幼児洗礼	ソフィア・スミレ よしこ アデッレ アギュラーサイオン（4/17）
	成人洗礼	ヨセフ 宮城 彰（4/17）
安里教会	幼児洗礼	ミカエル兼城 慈和（3/12）、テレジア 新垣 琳子（4/17） アレクサンドリアのカタリナ 佐久川 理桜（4/17）
	成人洗礼	バルバラ 佐久川 絵理賀、アンナ 佐久川 結衣、ベロニカ 中村 塁、マリア 源河 美津子、 アシジのフランシスコ 中村 拓登、アシジのフランシスコ 知念 哲也（4/16）
与那原教会	成人洗礼	フランシスカ 新垣 弘美、クララ 新里 由樹菜、セシリア 長嶺 秋乃（4/16）
普天間教会	幼児洗礼	ラファエラ 塩川 花月（4/17）
	成人洗礼	アビラのテレジア 近藤 良子（4/17）

葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥堀町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～

葬典社（そうてんしゃ）

＊創業30数余年・・・。
＊皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
＊ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

（実務担当）比嘉（ひが）　高茂（たかしげ）

24時間受付

☎098-853-1059（てんごく）